

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

【巻頭言】 社会福祉の人権とバルネラビリティ

著者	秋元 美世
雑誌名	東洋大学社会福祉研究
巻	11
ページ	1-1
発行年	2018-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010147/

【巻頭言】

社会福祉の人権とバルネラビリティ

秋元 美世

人権や権利について論じられる場合、自由権から社会権という枠組で取り扱われるのが一般的であろう。すなわち、近代的な意味での基本権人権という観念の出発点となった市民社会では、権利の主体として自立した強い個人が前提とされていた。そして市民社会では、個人としての市民が、自らの幸福を制約をうけることなく追求できることこそが重要と考えられた。そのような市民社会においては、介入を排除することで保障される自由権が基本となるのは当然のことであった。ところがそうした市民社会の自由権中心の枠組みは、その後、現実社会の実態と乖離していくこととなる。つまり自由を保障するだけでは、生存自体が危ぶまれることとなる現実が存在することを認めざるを得なくなってきたのである。そうした中で登場したのが、現実の社会経済関係を営む具体的な人間を想定した社会法的人間像（弱い人間像）であった。こうして、自由権にプラスしてこの段階で登場したのが、個人の生存のための経済的給付やサービスを、国家（政府）によって保障することを求める社会権だったのである。社会福祉の給付やサービスもこうした社会権の保障として位置づけられ、福祉はこれらの給付の提供によって保障されるものと考えられた。ちなみにこうした自由権と社会権との枠組は、第一世代の人権と第二世代の人権として区分されることもある。

社会権が、抽象的な自立した人間像ではなく、様々な弱さを抱えた具体的な人間を想定してきたことから、社会福祉でバルネラビリティの問題が人権問題として論じられる際にはもっぱら上記の第二世代の人権（＝社会権）とのかかわりで取り上げられてきた。しかしあらためてここで指摘しておきたいのは、第一世代の自由権とのかかわりでも、その出発点、あるいはその背景となっている考え方について目を向けるならば、そこにバルネラビリティへの問題関心を見て取ることができるということである。たとえば第1世代の人権の基盤には、「法の下での平等」というものがある。これは、現実社会での個人の力関係の相違が、権利が問題になるような法の世界にストレートに持ち込まれないようにすることを意図するものであり、その意味するところは、バルネラブルな者も法の下では力の強い者と同じ位置に立つことが保障されるということである。さらに同様な意味をもつものとして、「人間の尊厳」や「個人の尊重」といったものもある。「人間の尊厳」が前提にしているのは、自由を求める強い個人だけではなく、むしろ弱い人間も「人間である以上、人間らしく扱われるべきだ」とする、弱い人間像も視野に入れた捉え方なのである。

旧優生保護法の下での強制不妊手術が重大な問題として関心がもたれている今日、あらためてバルネラビリティという観点から第一世代の市民的権利や自由権の問題について考えてみるものが求められていると言えよう。